第十三巻

まおゆう

Archenemy and Hero

魔王勇者

—「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」—

原作 川上稔
出典 橙乃ままれ
石田あきら
キャラクター原案 水玉螢之丞・toi8

Kadokawa Comics A

まおゆう 魔王勇者

まおゆう

魔王勇者

第四十一話

Archenemy and Hero
41st chapter

第四十一話

勇者に助けてほしくて勇者を好きになったわけじゃない

漫画原作
石田あきら 橙乃ままれ
キャラクター原案 水玉虫之丞・toi8

あくおか

Archenemy and Hero 魔王と勇者

——「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」——

まおゆう
魔王勇者

第十三巻

原作 橙乃ままれ
キャラクター原案 水玉螢之丞・toi8
原作 石田あきら

第四十一話 Archenemy and Hero 41st chapter 001
勇者に助けてほしくて勇者を好きになったわけじゃない
第四十二話 Archenemy and Hero 42nd chapter 053
答えは常にある（人によって同一とは限らないけれど）
第四十三話 Archenemy and Hero 43rd chapter 091
この街が…なんだかすごく大切で

まおゆう魔王勇者

「この我のものとなれ、勇者よ」「断る!」

Archenemy and Hero

第十三巻

漫画原作
石田あきら 橙乃ままれ

キャラクター原案
水玉螢之丞・toi8

コラムページ
竹之内大輔(レッカ社)
野村昌隆

まおゆう 第十二巻のあらすじ

Lectures on Archenemy and Hero
Outline of volume.12

「魔王」と「勇者」の劇的な出会いから3年。人間界の「冬越し村」を拠点に始まった二人の活動によって、世界は大きく変わりつつあった。魔王がもたらした技術や知識により、「冬の国」や「鉄の国」、「氷の国」といった南部の人々の暮らしが大きく改善。国力をつけた三国は「三国通商同盟」を締結し、経済面、精神面の双方において、大陸に君臨する「聖王国」や「中央聖光教会」からの自立を果たす。さらに、水面下での外交活動の結果、大陸東部に位置する四カ国他が南部三国同調。冬の国の「冬寂王」を盟主とする「南部連合」が結成に至った。

一方、魔界では魔王が魔族の大会「忽鄰塔（クリルタイ）」を開催し、人間との戦を訴える。この期間中、蒼魔の王子・「蒼魔の刻印王」が魔王暗殺を目論むが、魔王は重傷を負いながらもどうにか一命をとりとめた。「黒騎士」を名乗っていた勇者は族長たちに正体を明かし、魔王の秘めたる想いを打ち明ける。その結果、族長たちは魔王への思いを新たにし、各氏族が結束する結果となった。

その後、魔王暗殺に失敗した蒼の刻印王は、人間界へと進出。白夜の国」を滅ぼして占拠する

と、鉄の国へと軍を進めた。南部諸国は「女騎士」を指揮官とする軍を編成。鉄の国の「蔓穂ヶ原」で迎え撃ち、激しい戦いが始まった。ところが、そのさなかに聖王国の「王弟元帥」と「大主教」を擁する「第三次聖鍵遠征軍」の先遣隊が出現。戦っていた両軍に対して無差別攻撃を開始する。この先遣隊は女騎士の計略で撃退されたが、蒼魔軍は壊滅し南部連合軍も少なからぬ損害を受けた。この戦いで、銃撃を受けた勇者と蒼魔の刻印王は重体となったが、勇者はその場にやってきた傭兵に救助される。一方、蒼魔の刻印王は傭兵の手で命を絶たれ、はからずも蒼魔族の問題は解決した。

しかし、聖鍵遠征軍の本体はそのまま白夜の国に駐屯し、魔界を目指している模様。いずれは、開門都市が戦火にさらされることは明らかだ。武器を、大量に所持する聖鍵遠征軍。およそ20万という大軍にどう対処するのか。一難去ってまた一難。魔王と勇者は、新たな問題に頭を悩ませることになる――。

まおゆう人物紹介

Lectures on Archenemy and Hero
Character Profile

魔王

「外なる図書館」で得た知識をもとに、世界の変革を目指す魔族の王。葵穂ヶ原の戦いで、マスケットの技術が流出していた事実を知る。意気消沈していたが、この問題に立ち向かう決意を固めた。

メイド長

魔王が幼い頃から彼女の世話をしている側近。魔王の幸せを願い、彼女の夢をかなえるため、手足となって尽力している。

メイド妹

魔王の館で働くメイド。食いしん坊が高じて料理の道に目覚めた。現在は貴族子弟と行動中。

メイド姉

魔王の館で働いていた少女。魔王たちのもとを巣立ち、自分が成すべきことを模索している。

王弟元帥

聖王国の王の弟で、人間界の英雄と目される実力者。第三次聖鍵遠征軍の指揮を執る。

東の砦将

聖鍵遠征軍の元士官。開門都市の住民「衛門族」の族長として、都市の運営に携わっている。

百合騎士団長

大主教に仕える百合騎士団の団長。聖光教会の教えと大主教に絶対の忠誠を誓っている。

大主教

「光の精霊」を崇める聖光教会の長。「聖骸」なるものを求め、第三次聖鍵遠征軍に同行する。

火竜公女

火竜族の長・火竜大公の娘。開門都市の魔族代表として都市の政策運営にあたっている。

青年商人

人間界最大の経済団体「同盟」の幹部。世界情勢の変化に乗じ、経済面での改革を試みている。

勇者

魔王とともに歩む青年。強大な力をもちながらも、かなり気さくな性格で、魔王の理想を実現するため各地を奔走する。南部諸王国の王たちはもちろん、魔族の族長たちからの信頼も厚い。

女騎士

元「勇者の一行」のひとり。魔王の正体を知ったうえで協力している。最近は、軍の総司令官として南部諸王国を支えている。

女魔法使い

元「勇者の一行」のひとりで、人間界最強の魔法使い。魔王と同じ図書館族となり、世界について数多くの知識を得た。

冬寂王

冬の国の若き王。鉄の国や氷の国と中央から独立、新たに「南部連合」の結成を決意した。

執事

元「勇者の一行」のひとり。執事として冬寂王に仕えるかたわら、諜報活動などもこなす。

蒼魔の刻印王

蒼魔族の長

鬼呼の姫巫女

鬼呼族の長

紋様の長

人魔族の長

火竜大公

火竜族の長

妖精女王

妖精族の長

碧鋼大将

機甲族の長

巨人伯

巨人族の長

銀虎公

獣牙族の長

奏楽子弟

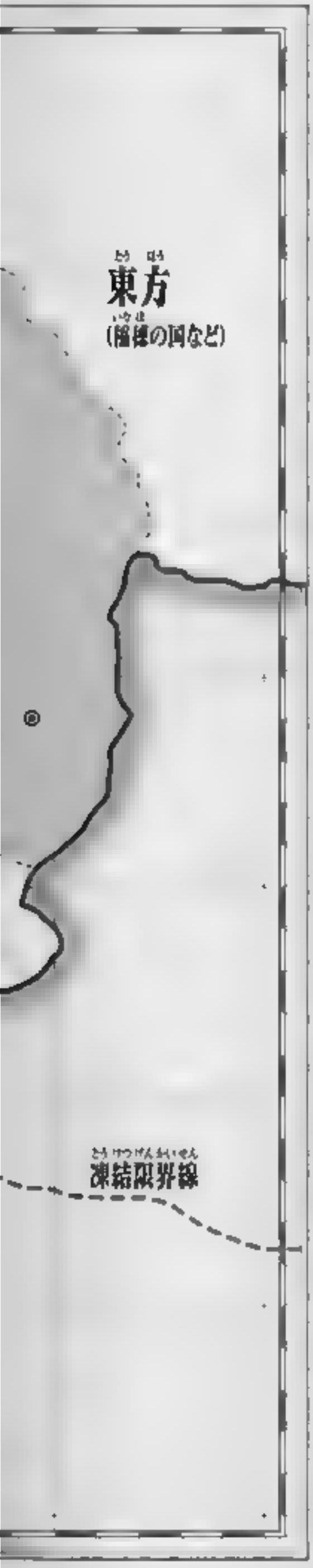
「紅の学士」の教えを受けた森歌族の少女。吟遊詩人で、歌の力で戦いを止めようと考える。

土木子弟

「紅の学士」の教えを受けた鬼呼族の青年。開門都市や「大空洞」の工事を請け負っている。

まおゆう 主要人物の所在

Lectures on Archenemy and Hero
Location of the Characters



勇者 魔王

女騎士

戦いののち、魔王と勇者は館に戻ったようだ。女騎士の所在は明確ではないが、緊急時に対応できるよう、村に逗留しているものと思われる。

冬寂王 執事

妖精女王

鉄の首都にいた冬寂王は、妖精女王をともなって冬の王都に帰還。南部連合との停戦、平和条約締結に向け、いくつかの取り決めがなされたようだ。

メイド妹 軍人子弟

料理の修業に来ていたメイド妹は、そのまま鉄の首都にとどまっている。軍人子弟も鉄の首都に戻り、メイド妹を連れて銀虎公との交流を深めた。

メイド姉 貴族子弟

聖王都での調査を終えたメイド姉は、白夜の国に入って貴族師弟と合流。隊長を失った領兵団の新隊長になった。今後の動向が注目される。

青年商人 女魔法使い

開門都市にいた青年商人は、女魔法使いの転移魔法で湖の首都にある同盟の作戦本部に帰還。聖鍵遠征軍を牽制するため、新たな行動に移る。

王弟元帥 大主教

曼穂ヶ原での戦いののち、王弟元帥と大主教は聖鍵遠征軍を率いて白夜の都に駐留。本来の目的である魔界侵攻に向けて準備を始めている

土木子弟

ゲート跡地の大空洞に建設していた橋がひとまず完成。同盟の中年商人に依頼され、新たに開門都市の城壁建設を請け負うことになった。

⚔曼穂ヶ原の戦い

この戦いに南部諸王国が動員できた兵力は1万。対する蒼魔族は2万5000の兵に加え、旧白夜の国の兵を動員しており、数のうえでは蒼魔軍が優勢だった。しかし、銀虎公に率いられた魔牙族の戦士8000が現れ、蒼魔軍左翼後方から奇襲を敢行。蒼魔軍が戦線の立て直しに追われるなか、蒼魔軍右翼後方に聖鍵遠征軍の先遣隊3万が現れて無差別に攻撃を開始した。蒼魔軍は聖王国や聖光教会と密約を結んでいたため、無警戒なまま攻撃された後方部隊が瞬く間に全滅。混乱が生じた蒼魔軍はいったん兵を退こうとするが、そこに先遣隊に攻撃を受けた南部諸王国軍の火計が発動。湿地帯が一面火の海となったことで戦いは終結した。この戦いで、逃げ場を失った蒼魔族は湿地帯中央で全滅。南部連合軍は3500名、聖鍵遠征軍は6000名の損害が出ている。

聖霊遠征軍進路
蒼魔軍進路
中央荒地
硝岩の国
紫旗女王国
砂丘の国
棚の国
旧森の国
落紫の国
聖王国
南部連合
波頭の国
聖王都
碧翠の国
湖の国
山の国
赤馬の国
麦の国
猪首の国
銅の国
暮の国
霧の国
錫の国
橋の国
青月海
滝の国
冬越し村
重機ケ原
鉄の首都
白夜の国
氷の国
鉄の国
白夜の都
冬の王都
冬の国
極光島
極大陸
大空洞
北
西
東
南

隊長…
だと…!?

この女が…!?

私は隊長になる
つもりはありません
――代行とでも
呼んでください

時期がきたら
この傭兵団の
生え抜きの人の
中から
新しい隊長が
決まれば
それでよいと
思います

それから
私は戦闘は苦手です
剣の振り方は
多少習いましたが

戦闘指揮なんて
やったこともあり
ませんし
できるとも
思えません

それじゃ
なんの役にも
立たないじゃないか
なんのための
司令代行なんだよ

戦闘からは
ここにいる皆さんが
守ってくれると
信じています

私は皆さんを
戦闘以外の
ものから守ります

戦闘で
守ってもらうのと
おあいこですね

私は今から
行かなければ
ならない場所が
ありますし

どうしても
護衛が必要
なんです

なんだ
こいつ

わけが
わからないぞ

この姉ちゃん
大丈夫か？

まともじゃねえぞ

ああ

それが師匠の教えを
受けた生徒共通の
悪癖なんだなぁ

真面目に
なればなるほど
頭がおかしい人だと
思われてしまうんだ

隊長だとか
代行だとか

そんなことを
議論してる
時間はない

認めるかどうかは
今 この状況を
どうするかで
決めさせてもらおう

逃げるか闘うか
それを聞かせてくれ

逃げるっていうなら
俺はあんたを
認めないぜ

逃げなきゃ
死んじまうよ！

逃げるか
闘うか

なぜ択一なの
ですか？

…はあ？

逃げるけれど
闘う

あるいは
逃げない上に
闘わない

両方選ぶ

そういった戦いを
始めるべきだと
いっているんです

おびき寄せて硝石ごと
爆発させるっていう作戦が
こんなにうまくいくなんて……

ゴオオ

硫黄
木炭
そして硝石
それらを
混ぜたものこそが
ブラックパウダー
聖鍵軍が使う
マスケットの
威力の源です
貴方がたが
持ち出した硝石は
聖鍵軍に渡っていれば
大きな戦力と
なっていたでしょう
硝石を
持っている限り
聖鍵軍はずっと
追ってきます
ここで硝石を
使い切ることで
追っ手はあきらめ
しかも 聖鍵軍に
多大な打撃を
与えることが
出来ました
これで私を
代行だと認めて
くれますか？
フッ

俺は認める

おお！

心意気に感じるってのが

俺たちが隊長から受け継いだ大事な宝もんだ

ヒュー

代行！

アネゴ！

これだけ派手にこなしてくれるお嬢さんだ

大した度胸だ

さあ代行

これからどうするのか聞かせてくれよ

まずは白夜の国へ潜入します

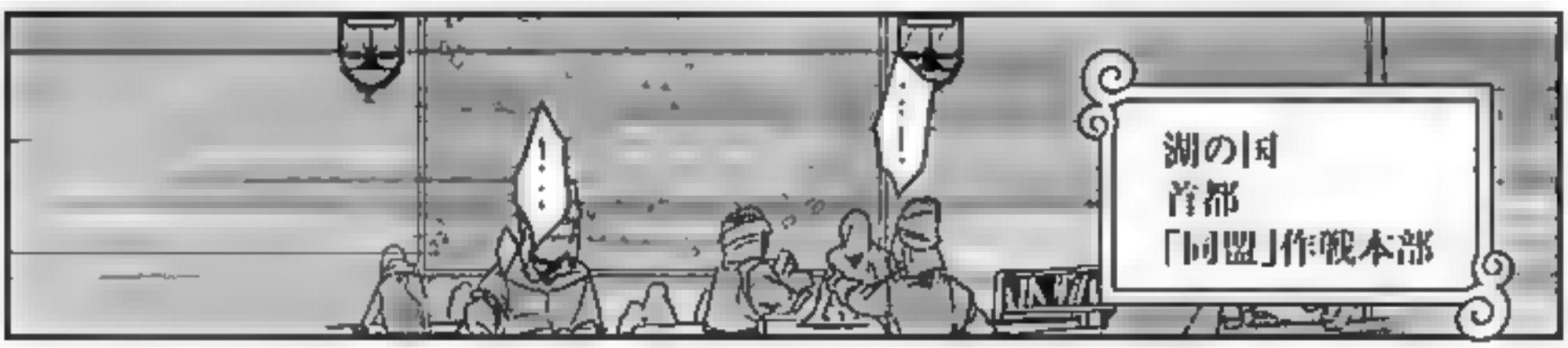
!?

…あの聖鍵軍がうじゃうじゃいるところへ…？

ええ

そうして
情報を集めて
そのあとは

…船をぶんどりましょう



秘密工房及び
銅の国の
鉄工ギルドは

木炭の枯渇に
喘いでいる
ようです

締めつけが
効果を発揮して
きましたか

…しかし
まだ足りませんね

関税をとりあえず
木炭馬車一台あたり
金貨六〇枚あたりから
はじめましょうか

六〇枚!?
木炭
そのものよりも
高額ですよ！

この程度では
戦は止められない
止める気もありませんが…
考えなしに暴れられては
困ります

…相手は聖王国と
その背景の教会
油断をすると
こちらが
押しつぶされます

彼らの野望は
狂える炎ですね
確かに

魔界へ攻め入って
領土をかすめ取る
という貴族の欲求は
教会の許可を得て
燃えさかる炎の
ようですな

——しかし
御しきれるの
ですかね

欲望は
人のきがです

使いこなせば
富をもたらす

それは欲望を御して
みずからの武器とした
ときだけです

もし欲望に
使い手が
操られれば…

その先に
待つのは破滅

我ら商人は
それをよく
知っている

我ら商人の戦場では
今がまさに修羅の刻

ついてこられぬものは
振り落とされるだけ

そう
でしょう？

子弟殿

冬の国
王宮
予算編成室

金貨六〇枚
ですか

…これは
もはや防衛と
いうよりは攻撃

制裁関税と
思われる数値
ですね

たとえこれで
軍事的危険度が
高まったところで

経済的
資源的締めつけを
強化すれば

吊り上げられた
危機を逆に実際には
押し下げることが可能
という判断ですか

…やはり商人の
小せがれごときが
かなう相手じゃ
ないですね

「同盟」は

ふ、

どうしたんですか？

いや なにおっかない人が
おっかない手紙を
送ってきたんだよ

どんな怖い
手紙だったんですか？

南部連合と
戦争しそうな人たちが
おっかない武器を
作れないように

木炭の値段を
値上げしましょう

――そんな
手紙だ

？

優しい手紙
ですよね？

は？

だって
武器を作ったら

敵の国の人も
戦争しなきゃ
ならないですから

間違え
ましたか

いや
それも
一面の見方かな

戦争は
よくないです

帰ってこない
兵隊さんがいると
ご飯がおいしく
ないですよ

献策するか

…王にはまた悪評をかぶってもらうことにもなりかねないけど

それも仕方ないだろうな

おい ワンコ

はい！

王のところへ行く一緒においで

はい！

マスケット…
手に入れたの
ですか？

戦場を捜索して
何個かはな

魔王から
大体の説明は
聞いた

今度の
聖鍵遠征軍が
やっかいなのは

このマスケットの
もつ特性に
正しく気がついて
運用してきた
ところに
あると思う

このマスケットの
一番の特徴は

「人数を戦闘力に
置き換える」という
部分だと思う

だとすれば
同じマスケットと
同じ戦法で
ぶつかりあえば
人数が
多い方が勝つに
決まっている

…となると

こちらが
マスケットを
用意出来た
としても

聖鍵軍と
同じ運用法で
対抗するのは
難しいですね

だな

人数差では
圧倒的だ

資金と物量でも
不利だ

今から我らが
マスケットを作っても
数で追いつくのは
不可能だろう

…となると
質で対抗するしか
ないだろうな

マスケットの
改良か…

射程だけを
増やす方法は
ないのか？

相手と同じ戦場で戦うのは無意味でありばかりか有害だ

であるならば

同じ戦場にいるべきではない

射程があれば相手の攻撃の外側から戦うことが可能だ

相手の戦場に入らず一方的に攻撃できる

わかった

こちらで方法を考えてみる

頼む

あいがと

どうも

これからどこかに行くのか？

爺さんの見舞いにな

勇者よりも重傷だったしあの歳だ

…それに
相談(そうだん)したい
こともあるしな

？

急(きゅう)に訪(たず)ねたら
驚(おどろ)くかもな

どうせ
ひとり寂(さび)しく
しているのだろう
たまには優(やさ)しく
接(せっ)してやるとするか

しょうが
ないな？

ぽっ
ぽっ
ぽっ
ぽ～

シャ～ン

はっ
ほふ…
おだまりにゃ～っ
まぁでも元気そうで安心した
これでも鍛えていますからな
にょほほほ

どうしました？

この老爺の知恵でも借りにきたのですかな？

勇者との仲を決定的にすべく

なんでわかったのだ!?

年の功と申しますか

一緒に旅をしていたあの当時から

あなたたち二人の視線の先にはいつでも勇者がいましたから

二人？

いえ

それはなんでもありませんよ

おまけに相手は魔王殿も女騎士も奥手ですからねあの勇者ですし

まあ相当の難物ですよ

そうなのか？

勇者はもしかしてその…

私たちのことが嫌いなんだろうか？

いえいえ

そんなことはないと思いますよ

勇者はねやっぱり怖いんです

あれだけの力を持っていますから

人間から嫌われることが

人間から怪物だと思われてしまうことが怖いんですよ

私は怪物だなんて思ったりしない

嫌いになんてならないのに

みんながそうであればよかったんですけれどね…

その一方で
特別な人が
できるのも

やはりとても
怖いんですよ

特別な人を
作って

――その人が
離れていくのが
たまらなく怖いの
でしょう

どこかしら
無意識のうちに

つらい未来を
避けているのかも
しれませんね

そう落ち込まないで
ください

この爺に
素晴らしい策が
あります

本当か？

張りきりすぎだ勇者
それほどじゃない
リハビリだよ

オーイ…

これ以上は練習禁止
いいからちょっと来い
ちょ…

まだまだカンが戻らないからな

水晶農園には
来たことなかったか

ああ
はじめてだ

ほ！

魔王に言われて
作っては
みたものの

毎年 暖房費が
バカにならないし
大変だよ

ゴー

すごい
湯気だな

湯で暖房して
いるんだ

暖かい地方の
植物を試験的に
育てる仕組み
だからね

ああ

ここだ

暖房に使う湯の一部を湯浴みに使えるようにしてあるんだ

汗を流したいだろ？

ああいいな

いや

出てってくれないと脱げないだろ

え

背中を流してやろう

かゆいところはないか？

あ ちょっと左のとこ

このくんか

おお

なんか
すごい手際が
いいな

仮にも
騎士だからな

ブラッシングは
得意だ

？

言葉が
しゃべれる
生き物の相手なんて
ちょろいものだ

フフ…

なんのことだ？

こちらの話だ

いいですか
秘策とは——

勇者を人間だとは
思わないことです

馬です

勇者を馬だと
思いなさい

馬の飼育ならば
手慣れたもの
でしょう?

馬を馳らす
ときには
どうします?

話しかける

首筋を撫でたり
ブラッシングを
したり

私がさわるのは
当たり前で
気持ちよいこと
だと思わせる

さらには
人参やリンゴを
与えたりもするな

そのとおりです

そんな
簡単なことで
よいのか!?

にょほほほほほほ

男性を
手なずけるのだって
基本はまったく
変わりません

健闘を
祈っておりますよ

勇者(ゆうしゃ)は
ちょっと
がんばりすぎ
たと思(おも)うぞ

……

少(すく)なくとも
私(わたし)は

勇者(ゆうしゃ)に
助(たす)けてほしくて
勇者(ゆうしゃ)を好(す)きになった
わけじゃない

それはたぶん
魔王(まおう)も一緒(いっしょ)だ

え…

何を真っ赤になってるんだ？

いや そんなことを突然言われても…

？

ああ そうか

面と向かって言ったのはもしかしてはじめてだったかなぁ

私は勇者のこと好きだぞ

好きじゃない 相手の剣になりたいわけがないだろう？

勇者は強いよ

戦ったらたぶん私なんか足元にも及ばないだろう？

でも

だからその方法で強くなるのは

もう限界だと思う

……

だから勇者が強くなるには

もっと自分を好きにならないと

一緒に旅をしていた頃の勇者も優しかったけれど

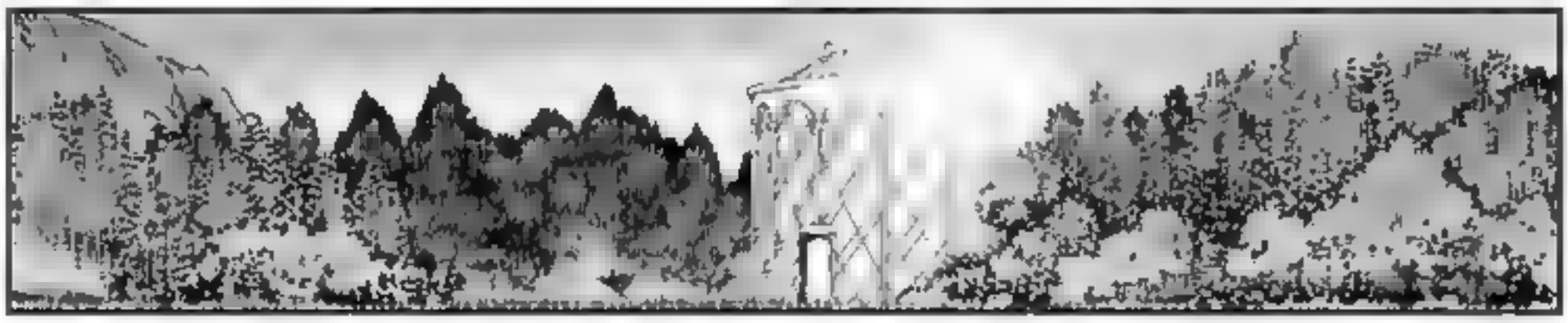
今の勇者の方が何倍も優しいし何倍も大きいさ

だから
今勇者が
抱えている悩みも
苦しみも

そういうの
全部が綺麗に
なくなるなんて
言えないけれど…

もし仮に
抱えたままでも
もっと強く
なれるよ

…そうなれば
いいな



女騎士様の
要望は手強い
ですか？

なかなかになぁ

方策は思いつくのだが
工作精度や冶金技術は
一足飛びには上がらぬ

やはり
一度は図書館で
みっちり調べないと
まずかろうなぁ

あの遠征軍とやらは
何とかならぬのかなぁ

そんなに
あれが問題ですか？

へ？

いえ

そんなに
強大な脅威だとは
思えないのですよね

出かけていって
首脳部を上から順に
百人ばかり殺せば
済むのではないかと

勇者様や魔王様が
手を汚される必要も
ないかと存じます

僭越ながら
私が…

……

まあ
確かにな

だが
それで皆は
納得するのかな

納得
ですか？

実を言えば
私の当初考えていた
課題はほとんどクリア
されているんだ

人間世界側の
飢餓の問題は
馬鈴薯および
玉蜀黍の栽培で
ずいぶん緩和された

修道会の助力も得て
種痘が広がり始めた
天然痘の犠牲者は
確実に少なくなる

人間世界には
南部連合なる
経済圏が誕生した

しばらくは
軍事的緊張が
続くだろうが

その状況さえ
乗り切れば
二つの経済圏が
存在した方が
発展の速度も
安定度も増すことは
確実なのだからな

魔界では
長い間続いていた
氏族間のわだかまりも
ゆっくりとだが
解かされつつある

現在進んでいる
交易街道の計画は
確実に氏族同士の
かけ橋となるだろう
魔界は歴史の
新しい局面へと
入ったのだ

——こうして
考えてみると

「人間界の飢餓」

「南部と中央の
使役関係」

「魔界内の
氏族間の対立」

どれも解決の
道しるべは
できたのだ

だが

それらは
乗り越えられない
ものではないはずだ

もちろん
いずれも根の
深い問題だし

これからも
トラブルは
あるだろう

では 今
起きている
戦争は…

うん

何か理屈に合わない
力が働いている…
そんな気がする

食料の問題も
雇用の問題も
外交の問題も

経済を中心に
まわっている

経済がうまく
いかなければ
世界は幸せには
なれない

でも

経済が
うまくいく
だけでも

幸せには
なれないのかも
しれないな…

幸せか

――私には無縁すぎて難しい問題だ

こんなところでいいのか？

うん

図書館には一族以外は入れないからな

おそらく調べ物に三日ほどかかるだろう

三日目にいなかったら五日目だ

その日 迎えに付近を捜してくれ

わかった

何を調べるんだ？

今回は技術的な問題に的を絞る

冶金技術と工学系だな

声は拡く出せないから 潜水艦も作らないと…

よくわからないが
そっちはまかせた

私(わたし)のいない間(あいだ)
頼(たの)むぞ

おう！

？

この歌は…？

いい曲だなや

ああ

なんだか優しくてもの悲しい曲だなぁ

あたしの故郷の曲だよ

でも詩人さん
俺たちに
ついて来て
いいのかい

このままだと
俺たち魔界へ
戦争に行くんだよ

シャレに
ならねぇべ

うん
大真面目だよ

みんなが百回
剣をふるうなら

あたしは百回
剣を止める
ために歌うよ

そう
決めたんだ

うちの師匠の
教えを
受けるとき

真面目に
なればなるほど
頭がおかしい人に
思われるんだ

第四十一話 終

勇者に助けてはじくて勇者を好きになったわけじゃない

第三十九回

制裁的な関税の使い方

貿易品にかけられる関税には
産業の保護という目的がある。
一方で、使い方によっては
攻撃的にも使えるシステムだ。

青年商人は木炭の関税を引き上げることで、
中1国が主導するマスケットの生産を抑制しようと考えた

関税は使い方によって経済的な攻撃にもなる

国家間でさまざまな品物が行き交う貿易。「まおゆう講座 第十六回」でも解説したが、この輸出入を行う品物にかけられる税金が関税だ。現代では、おもに国内産業の保護を目的として、輸入する品物にかけられることが多い。

関税をかける目的はおもに3つ。ひとつは国家財源としてのもので、とくに開発途上国では国家収入の5割以上が関税という国もある。2つ目は、関税により品物の流れをコントロールしたり、産業の誘致を目的とするもので、先進国はこちらの目的で関税をかけている。そして、最後の3つ目が制裁機能としての関税だ。

現代においては国際的商取引を協議する場として、「国際貿易機関」が設立されており、輸出する品物の価格を国内価格よりも安く定めることを、「不当廉売」として禁止している

また、政府からの補助金や為替政策による輸出コストの引き下げや、労働者に低賃金を強制しての生産コストの引き下げなどで、不当に安くした品物を「ソーシャルダンピング」という。こうした廉売関税や相殺関税などで対抗することが認められている。

さらに、WTOの協定に違反していたり、自国の貨物が不当な扱いを受けている場合は、報復関税と呼ばれる関税の割増を行うこともある。

さて、劇中では、同じ「同盟」の青年商人が、「冬の国」に対し、木炭に価格の倍以上もの関税をかけるよう持ちかけていた。青年商人の狙いは、「鋼の国」へのマスケット製造工場の生産力を低下させること。よって、ここでいう関税は輸出される木炭供給を断つことで、同国にあるマスケットの木炭の流れをコントロールしようというわけだ。

関税が単価よりも高いということは、輸出するほど赤字になるということ。関税を大幅に引き上げることで、青年商人が攻撃的な使い方もできる。現代でも関税はしばしば問題にされる。関税はそれだけ慎重さが必要な制度なのだ。

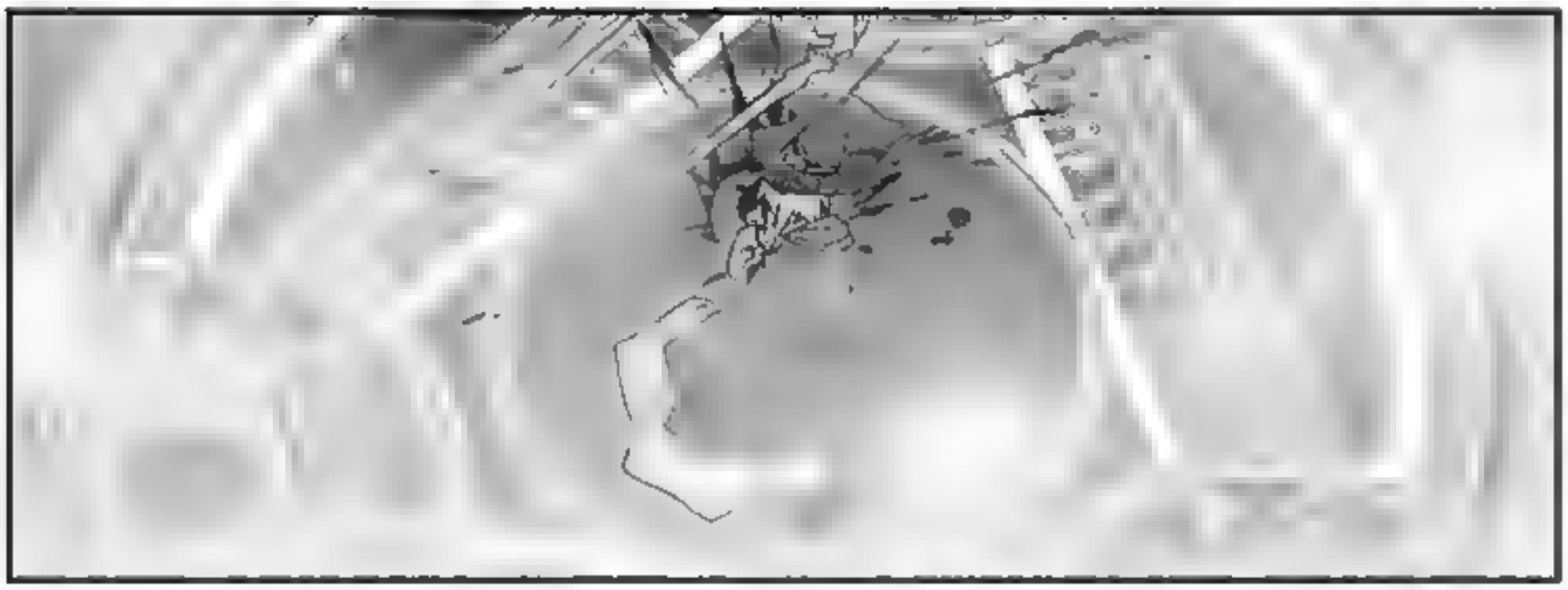
商人仲間の発言は、国内で木炭を扱う商人たちからの反発を考慮してのものだろう

聖戦のため

鋼の国
農村部
カマーガマ…
おや
もう日暮れだ
おかしいな
教会の鐘は
鳴ったかい？
忘れたのかい
教会塔の鐘は
聖戦で使う武器に
変えられちまったよ

それにしても
腹へったなぁ
ああ
麦も豆も
兵隊さんたちが
持ってっちまった
今は
これしか…
！
そいつは南の国の
異端指定の…
背に腹は
変えられねえよ

南の国といえば…
知っているか
南の修道院では
疱瘡にかからなくなる
クスリをくれるそうだ
そんな話が
あるのか!?
南の国…
異端の国かぁ…
どうか わしらにも
お恵みをくだせぇ
光の精霊様…



ご主人様
ご主人様
大丈夫ですか？
ぴくっ
大丈夫

なんかヘンな音がしたぞ

通信の距離限界

私が……人間界の援護 する

できるのか？

……魔王の代わりは……私がする

あ？

なんだって？

大丈夫

第四十二話 Archenemy and Hero 42nd chapter

答えは常にある(人によって同一とは限らないけれど)

待て！

だら…

だらら…

だらら…

もういいだろう

食べろ

おう！

食べ終わったらブラシしてやるからな

この間から人間扱いされていないような気がする

でもやってもらう

ゴッ

ゴッ

勇者…
大事な話があるのだが
なんだー？
この件に関しては
話が錯綜するのも混乱するのも
乙女の心とういうは今だけ置いておこう
？
誤解を受けるのも曖昧になるのも困る
ゆえにはっきりと言う！
はい！
魔王がもどり次第
勇者と褥を共にしたい

——お互いその意味がわからない年齢でもないよな？

大丈夫だ勇者は心配することはない

私たちだって初心者だが魔王と二人で作戦を練った

？

私が攻撃魔王が守備だ

何するつもりだよ

無理にコメントしなくていいっていうかしないで欲しい

こっちだって顔から火が出そうだ

この件は一応魔王も了承済みだからな

そうなのか

その…
こんなこと
言いたくない
けれど

やっぱり
「次」は
大勝負というか
すごく大きな
戦争になってしまう
気がするし

負けるつもり
とかは
まったく
ないんだけど…

しかし…
いや

…うん
わかった

いいか?
わかった
ぱっちりだ

覚悟完了だ！

それでこそ勇者だ！

取り消しはなしな

はやく魔王かえってこないかなー

ああ…

開門都市郊外

これはこれは！

やあ！商人さん

けっこうな人数じゃないですか！

とても これだけの人数を集めるほどの資金は お渡しできていないでしょう？

ええ まぁ

どうやって集めたんです？

妾が街の衆を紹介したのじゃ

おや お知り合いでしたか

ええ

先日 開門都市の再設計をしているときに初めてお会いして…

都市の整備とは面白き お話 興味をそそられました

しかし
これだけの
規模の工事

賄うためには
どれだけの資金が
あっても足りぬ

そこで 神殿の
修復ということで
街の衆に手助けを
頼んだのだ

もともと
この都市には
古い神や
無名の神をはじめ
いくつもの
神殿や ほこらが
ありまする

都市の
住民は
程度の違い
こそあれ

それぞれの
神殿に参拝し
日々の平安や
商売の繁盛を
祈っておるもの

好景気の現在
神殿の改修という
ことになれば

喜捨も集まり
ましょうし

労役を手伝う
人も 多いので
ありまする

働いてもらった方には
日当よりも
食事を腹いっぱい
食べてもらう

そういう方式に
しました

――寄付して
いただいた資金は
すべて食料にして
しまいましたよ

それで
なんとか 動き
はじめましたか

働いている方も
楽しそうゆえ

?

これが
図面ですか

ガサッ…

えらく
変わった形の
防壁ですね…

それに ずいぶん
壁が厚いような…

ここまでの
厚さが
必要ですか？

必要になる
でしょう

この世代でも
次の世代でも

師匠は
言っていました

今 必要な
ものを作る

それだけの
浅い視点では
土木はダメだ

と

百年の
計をもって
一歩と為す

…ここを故郷と呼ぶ
すべての人のために
最高の仕事を
お見せしますよ

「1夜の同
悲

ざわ…

代行って…

ええ
聖王都の大聖堂に
忍び込んだとき
以来です

さすがに
ドキドキ
するねぇ

貴族子弟さんは
打ち合わせどおり
本隊八〇人を率いて
船を接収してください

へーい

私たちは
操船技術が
ないので

船乗りさんが
乗っている船を
運んでくださいね

人使い
荒いなあ

私たちの部隊は
あちらの税関に
忍び込みます

ここ数日
調べた感じでは

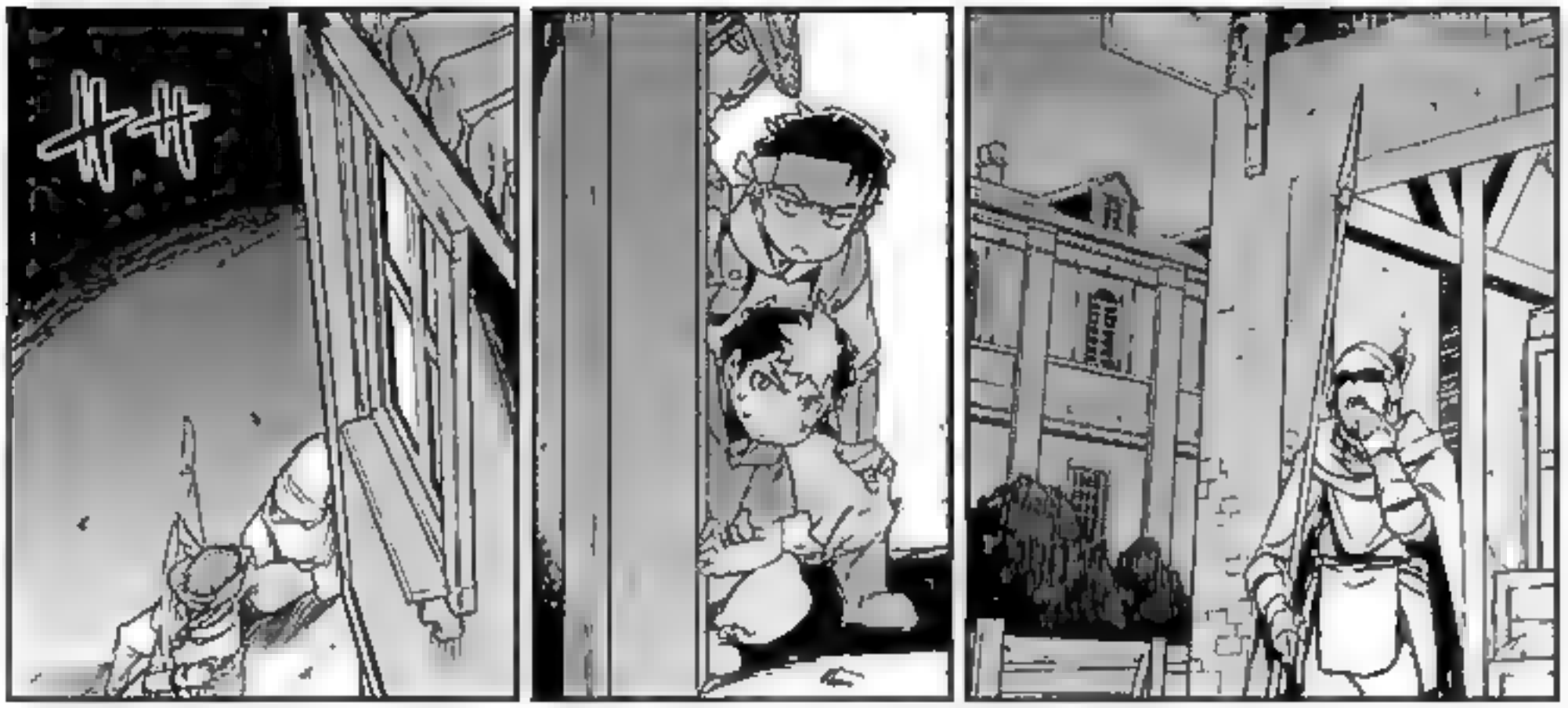
この時間
あの建物の中には
五人から八人が
寝泊まりしているのみ

可能なかぎり
血は流さない方法で
無力化してください

おう

おぉ

おー



後方確認担当する
前方制圧行く

おお…
カチン
おお

制圧完了

周辺の建物に気づいた様子はない

この税関に何の用事があるんだ？

とっとズラかろうよ

少し待ってくださいね

このあとは船をお借りして移動する予定なのですが

あいにく私持ち合わせが少なくて…

わかった！

聖王国からぶんどろうってハラだな！

おー

とんでもない
盗みは
よくないことです

まぁ
危急の事態なので
多少 犯罪的な
手法をとる覚悟は
あるのですが

はぁ？

じゃあ
なんで こんな
ところに

ですから
資金を少々
お借りしようかと

盗みと何が
違うんだ？

借用書を
書きます

なぁ
この姉ちゃん
マジなのかなぁ？
貴族の旦那が
言うには本気なん
だろうな
いいのかなぁ
こんなのが
代行で
乗りかかった
船だ
あきらめる
しかない
できました
この借用書を
机の上に置いて
金貨を運び出し
ましょう
え？
極…!?
この資金で
船員さんたちへ
せめてもの お詫びに
支払いをします
食料も
買い上げて
極大陸へ

混雑(こんざつ)しないうちに
魔界(まかい)へと
行(い)きましょう

あちらで
やるべきことが
山積(やまづ)みですから

鉄の国
職人街

クラクラ
しますね

うむ

あちこちに
行(い)ったり
来(き)たり

三連続転移(れんぞくてんい)は
キツいか

ちょっと頭(あたま)が
痛(いた)くなるな

慣(な)れかな

今日は鉄鋼工房の職人と打ち合わせがあるだけだ

夕方までには終わる

少々待っていてくれ

コホン

今日こそ屋敷に戻りたい

…よろしくな

お

おう

戻り次第勇者と魔王が共にしたい

？お？

どこにいたんだよお前!?

…用事があった

なんのさ

…入稿？

寝るな

ZZZ

…勇者はごきげん？

うーん

ぼちぼち

女魔法使いはご機嫌か？

……

ふつう

そっか

ご機嫌になるといいな

なんかあるのか？

困りごとか？

…ある意味そう

…話聞くぞ

「優れた問いは
優れた答えに勝る」

「なぜ
勇者と魔王という
特別な存在が
この世界には
ひとりずつ
存在するのか？」

たとえば
魔王が二人で
勇者はいない
であるとか
その逆で
あるとか

また勇者が三人いて
魔王は二人である
とかいう状況は
なぜ ないのか？

そのような状況は
この世界の歴史上
かつて一回も
記録されていない

「なぜ
勇者と魔王は
戦うのか？」

俺たちは
戦ってなんか
いない

……このような
例は 今回が
初めてで
今までは 常に
戦ってきた

今回は
特殊な例外と
考えた方が
いい

魔界における勇者が魔王

人間界における魔王が勇者

模倣子を造り出す経路が違うけれど本質的には同じもの

同じものが二つ

なぜ二つしかないのか？

なぜ同じものなのか？

特異点的存在とはいったい何を目的として「ある」のか？

そんなのに答えなんてあるのかよ

答えは常にある

人によって同一とは限らないけれど

勇者
もしくは魔王は
ある存在の
二つの終端

ひとつの
特異点

現世において
それが
二つの存在として
見えているだけ

いわば
ヒモ

ヒモの右端が
勇者

ヒモの左端が
魔王

――これが答え

常に両者が
セットで存在し

二人にも
三人にも増えず

ひとつの時代に
あつらえたように
対峙する理由

そして 同時に
戦う理由でもある

二つの端子が
接触したときから
このヒモは
収斂を開始する

端子同士が接続し
ヒモは円環となり
世界が完成する

世界を縛るヒモは
世界ごと小さくなり

「世界と共に
始まり直す」

炎のカリクティスの
古から続いてきた
あの やりきれない
伝説の正体がこれ

今の世の魔王は
その余りある力を
戦闘には まったく
用いなかった

…そして
その能力を
世界の拡張に
充てた

勇者も 魔王を殺害して
よしとせずに
その拡張に力を貸した

拡張は 技術や
経済から始まったが
やがて次々と
隣接レイヤに波及し

政治
外交
文化

はては
伝承の域にまで
影響を
与えようとしている

端子同士が たとえ
どのような形であれ
接触した今

収斂力は
作動している

にもかかわらず
魔王と勇者は
世界を拡張
させようとする

この
拡張する速度と
縮退する速度が
均衡して

世界は 停止
しかけようと
している

魔王の
出した答えは
間違ってはいない

けれど
それを実行する
ためには

この世界は
根本的な病理を
抱え込んでいる

病理？

停止？

――そう

それは
罪ではなく
病理

そのために
現実的な事象は
おそらく 次々と
立ち現れる

冗長系の歪みも
そのひとつ

何か
起きるのか

ひどいことか？

…おそらく
すべてが滅びる

……

嘘じゃ
ないんだよな？

どうしたらいい？

解決策はあるんだろう

なんでもするから言ってくれよ！

――どうしても？

どんなことでもやってみせる

頼むよお願いだ

……

……勇者はいつもズルい

え？

女魔法使い……？

そのときがきたらためらってはダメ

よっし
終わったぞ！

おつかれさまです

成果は
どうです？

これで女騎士の
リクエストに
応えられる性能を
確保できそうだ
射程は三倍に
なるだろう

戦争なんて
できるなら
未然に防ぎたいが

もし 衝突が
あるのなら
最小限の損害で
やりすごしたい

そうですね

勇者は
どこだろう？

いや…
さきに
仕立屋に
行くべきか？

うでぶ

おわっ
女魔法使い
ではないか

お久しぶりです
古城民宿
以来ですね

…図書館族
勢揃い

……

こちらには
どのような用事で…

いや
何か事情が
あるようだ

…
何が
あったのだ？

…二つある

まず
「天塔」の場所を
知りたい

…それは

魔王であれば
知っているはず

歴代魔王はすべて
その場所を
知っている

勇者の首を
捧げる祭壇の
場所として

もうひとつは？

勇者は旅に出た

貴女とすべてを救うために

貴女も貴女の務めを果たすべき時が来た

魔王

早かったな

…どうした？

ドキドキ

ドキ…

今日は中止だ

…どうやらタイムリミットらしい

どういうことだ？

私にもよくわからない

でも

今のこの流れを変えるために

勇者は何かを知ってそれをするために旅に出た

…女魔法使いが教えてくれた

…勇者はだからいないんだ

……

置いて行かれてしまった

魔王面倒くさいことを考えてはダメだ

勇者はちゃんと帰ってくる

きっと大丈夫

…自慢にもならないけれど置いて行かれるのは二度目だぞ？

でも大丈夫

だってあの時よりも勇者は優しいし強いじゃないか

勇者はちゃんと戻ってくる

だって勇者は守るために行ったのだろう？

帰ってくるために出かけたのだろう？

だからあの日とは違う

それよりも勇者を助けなきゃ

助ける？

…きっと
何かが起きて
いるのだろう？

勇者の
代わりをするのは
魔王と私しか
いないだろう？

勇者はきっと
魔王と私に
ここは任せて
出かけたんだ

そう
なのかな…

私のやることは
まだ
あるのだな…

きっとそう

もちろん

気合い
入れないとな！

…うん
……

女騎士

なに？

言いづらいけれど…

そのぱんつはさすがに小さすぎると思うぞ？

ヒュー

ヒュー

ふう

歩いて旅するのもひさびさだな…

終 第四十二話
否えは余にある、人によって同一とは限らないけれど

第四十回

都市の成り立ちと都市の建設計画

都市は人口の増加によって
集落から発展したものだ。
機能追求や防災の観点から
計画的に建設されることも多い。

かつての開門都市は、神殿の関係者や訪れる信徒を相手に商売をする商人たちの都市だったようだ。

古い時代から存在した計画都市

人類が農耕を行うようになったのは、約1万年ほど前と考えられている。それまでは狩猟や採集、漁獲で生活していたが、一時的な寒冷化による食料難などの影響で生活のスタイルが変化。河川の周辺などに定住し、集落を築くようになった。

農耕と同時に牧畜も始められ、食料供給が安定して集落の人口が次第に増加。やがて都市へと発展していった。

計画的に建設された都市は古くからあり、紀元前2500年頃に建設されたインダス文明のモヘンジョダロでは、碁盤の目のような整然とした区画が残されている。

大規模な都市の計画としては、ローマ帝国の首都ローマがあげられる。ローマの中心には集会を行う広場が設けられており、その周囲にさまざまな役所や神々の神殿、記念建造物、公共浴場、市場といった公共的な施設が設置されている。そして、一般の人々はこうした公共的な施設の外側に建てられた、インスラと呼ばれる集合住宅に住んでいた。

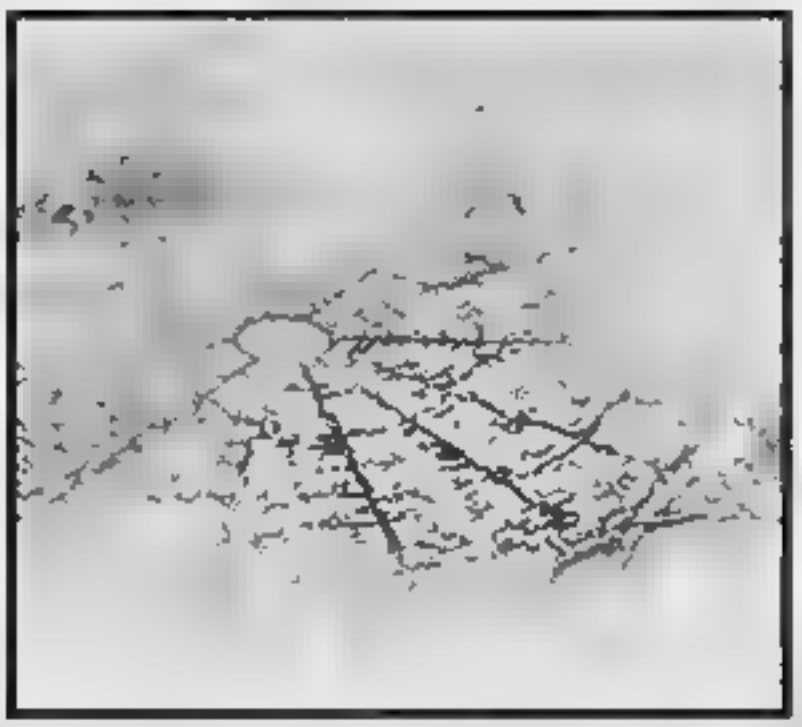
ローマは紀元前7世紀頃から都市国家としての整備が進められたが、もともと湿地帯だったところに人が増えていったという経緯もあって街並みは乱雑だった。しかし、帝政になったのちの64年、大火事が発生してネロによって整然とした街並みが整えられた。

とくに帝国が拡張した時期は、征服した地域の各地に計画都市を建設しており、その多くが今日の主要都市の原型になっている。

なお、こうした各地の都市は、外敵に備えて周囲を防壁で囲われた城郭都市だった。ちなみに、日本で建設された藤原京や平城京、平安京などは、これは中国などでも同様で、異民族との摩擦が絶えなかった大陸の都市では普通のことだった。

劇中では、開門都市のリニューアルが進行中。現代でいえば、再開発や区画整理といったところだ。

この都市は、地上との境界、いわば国境に位置する都市。新たな防壁も建設されるようで、開門都市は新たな城塞都市に生まれ変わるのだろう。



中央の広場や放射状の街路といった開門都市の特徴は、ローマ帝国時代の都市に通じている

喪失

A班休憩に入れ
ハイ
ハイ
C班作業開始
ハイ
ハ
蒼魔族領地
街道工事現場

オーイ…
その後調子はどうだい？
順調…ではあるがやはり気力がない
まわれたことはこなすしまじめによく働くがまわれた以上のことをしようとしない

休憩も食事も指示なしでは行わないありさまだまるで機械のような途中だよ
いい…
時間がいずれ解決してくれるだろうが…
あぁ
それまで何も起こらなければよいのだが

まおゆう
魔王勇者
第四十三話

それじゃあ
あたいらは
ここで店じまいって
わけかい？

いや
このまま軍に
くっついて商売を
続けるそうだ

なにしろ
この大軍だ
これを機会に
うまいことやって
稼いどかねぇと

じゃあ
いよいよ…

ああ
軍のほとんどは…

いよいよ魔界へ
攻め込むってか

はぁ
まさか魔界に
行くことに
なるとはね…

ハハハ…

これだけの
大軍がいるんだ
魔族なんて
ひとひねりよ

！

お
また
あの歌だ

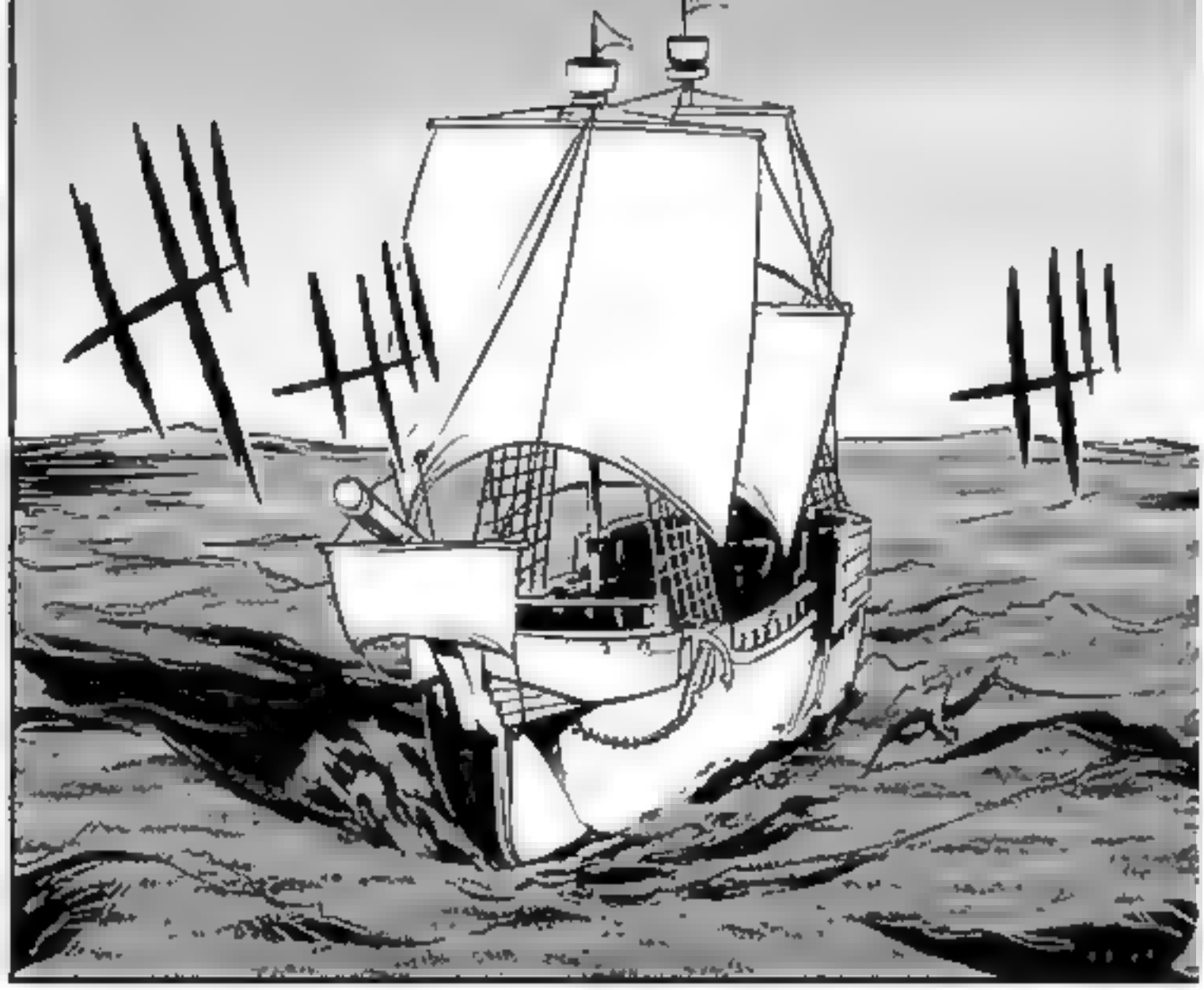
あの娘かい
いい声を
してるよ

この軍が
魔界に…

あいつの橋を
こんな形で
渡ることに
なるなんて

第四十三話 Archenemy and Hero 43rd chapter

この街が…なんだかすごく大切で



海に出たんだ
そろそろ代行の目的やこの遠征のことも聞かせてもらいたい
極大陸から魔界へ行こうってのはわかった
それでどうするつもりなんだ？

魔界へ先まわりして聖鍵遠征軍と魔族の停戦交渉の準備をするんだ
……
はあ!?

何も
本気で停戦が
できるとは僕も
考えていないよ

魔族はどうあれ
聖鍵遠征軍は
巨額の費用を
かけているし

大陸の国家の
半数以上が参加
しているんだ

出発はしましたが
何もしないで
帰ってきました

なーんて
わけにはいかなく
なっている

仮に遠征軍が
勝っても
負けたとしても

どこかで
妥協は必要に
なってくるんだ

停戦協定は
そのときに
きっと役に立つ

成立しなかった
としても
そのなかで作った
連絡手段はね

私はかなり
本気で停戦を
成立させたいと
考えています

でも やはり
難しいとも
思っています…

私が
考えているのは
貴族子弟さんとは
少し違って

この戦争の
危険性と 参加者の
意識のズレです

ズレ?

なんだ
それ?

戦争は痛くて苦しいではないですか？

人がたくさん死にますし

飢えたり寒かったり

辛いことばかりです

人は自由な生き物ですし

それは国家もまた同様であるべきです

私個人は戦争を憎みますけれど

戦争そのものは否定できないかもしれないと思います

言葉にできないほどくやしいですが…

この世界には戦争という行動でしか解決できないこともあるのかもしれません

しかし今回の戦争には全員がすべてきちんとした自由意思で参加しているかといえば

そうではないように思えます

停戦協定を一度は試みてみるべきだと思うのは

「本当はやめたい人」にチャンスを提供するためです

つまり…
なんなんだ？
ズレってのは

この戦争に潜む
危険性を 人々が
意識しないまま
事態が進行
してしまうことです

戦争はいつだって
危険だろう

今までの戦争とは
危険の大きさが
違います

聖鍵遠征軍も
魔族のほうも
全滅の危機です

いえ…

あるいは
世界の人々
すべての…

聖鍵遠征軍も
魔族の方たちも

私から見ると
背筋が凍るほど
あぶない橋を
渡っています

…十度渡って
一度渡りきれるか
どうかというほどの

なんの話
なんだ？

？

損耗率です

損耗率？

一度の戦闘で参加者の
どれくらいが死ぬか

そんなのは
常識だろう？

という話さ

ないぞ？

さあ…

一〇〇〇人同士の戦で
一日戦って
二〇人かそこらが
死ぬか大けがをする

五〇人
運が悪いと
一〇〇人は戦闘
できなくなる

半年もすれば
治る程度だろ？

私も実際に詳しく調べたわけではありませんが…

マスケットを持った一〇〇〇人の兵同士が半日戦った場合

その死者の数は一〇〇人を超えるでしょう

一〇〇人!?

たとえば鎧と剣を装備した二人の騎士が打ち合う場合

腕が互角であればなかなか勝負がつきません

疲労もするでしょう

今日のところは引き分けということになれば

もしかしたら明日は仲直りするチャンスがあるかもしれない

でもマスケット以降の戦いではそうはいかない可能性が高くなっていくんです

「仲直りする前に相手を殺していた」

それは言葉にできないほど恐ろしいことです

それに…
魔族も
マスケットは
持っています

!!
そうなのか!?

仮に持って
いなかった
としても

その技術を
入手できる
位置にいることは
確実です

ざわ
ざわ

いえ
もしかしたら
それ以上の
武器さえも…

殺し合いを
するには
危険すぎる線上の
綱引きです

…傭兵には
荷が重すぎる話だ

時代の曲がり角が
要求する血の量は
もしかしたら
魔族と人間の血の
すべてを合わせた
よりも 多量なの
かもしれない

だとすれば
それは世界の
終焉です

?

それで
その損耗率の話で
双方を説得
できるのか？

おそらく
魔族側は
説得の必要が
あまりないと
思うんですけれどね

話のわかる
知己がいます

それは
ありがたいな
交渉ってのは
顔見知りか
どうかが重要
だからねぇ

その交渉の
ために
俺たちは代行を
魔界の旅の間
守り抜けば
いいわけだ

そのためには
いくつか策が
必要なものも
あるのですが…

いずれにしろ
名前のない私が
突然 聖王国の
指導者にお会い
できるわけも
ありませんしね

とにかく
魔界へと
たどり着く
ことです

とりあえず
言われるままに
作ってるけどよ

あぁ

なんだか
妙な家だなあ

冬の国
首都

二階にも出入り口があったり…

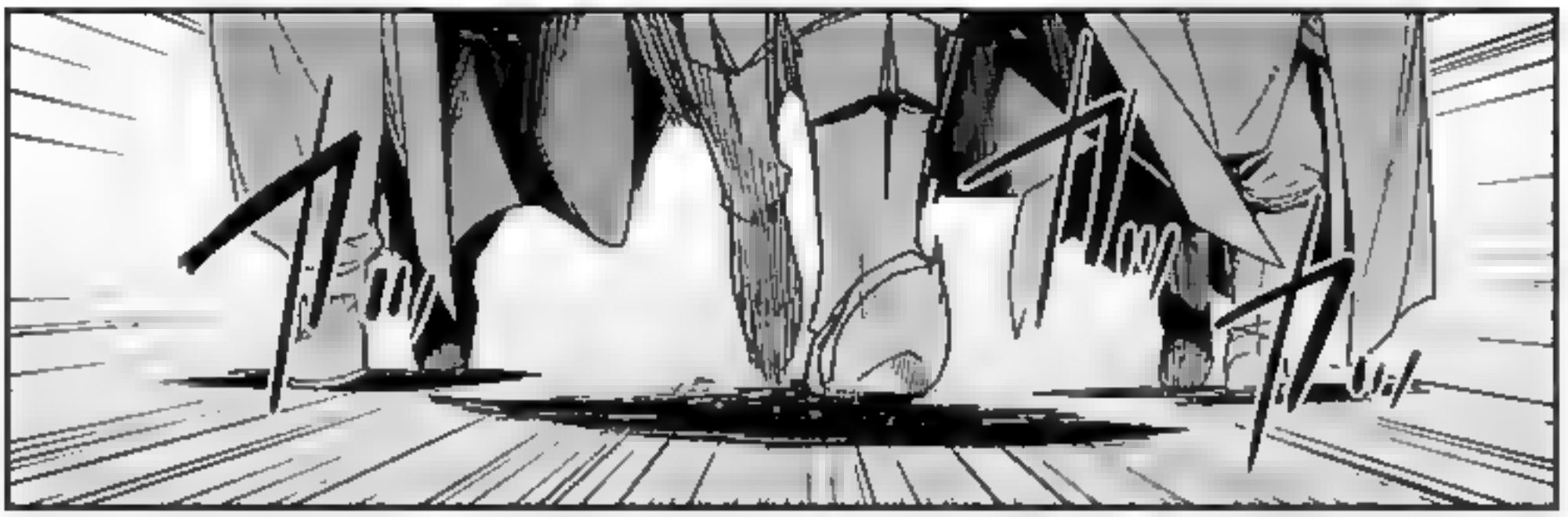
階段もないし

なにより家の真ん中に大きな木があるべ

いったいどんな人が住むんだかなぁ

カーン

さぁ



赤馬の国からの
使者殿と支援物資が
到着いたしました
客寂王
うむ
使者殿には
歓待と休息を

会見は…
晩餐会の
後になります
うむ

オーサマ
カッコイイネ
うん
うちの王様は
南部連合の盟主様
だからね

ところで君は妖精女王様が帰ったのに

いっしょに帰らなくてよかったの？

エヘン

連絡役ッテイウ

エラーイ

オ役目ガ

アルノデス

え

駐在大使って君のこと？

ソレハ…

キャー

サボってなんぞ仕事！

！

ん？

!!

財務長（ざいむちょう）！

この冬期装備（とうきそうび）と新型防寒具（しんがたぼうかんぐ）というのは…

はい

兵（へい）の訓練（くんれん）も始（はじ）めさせております

とりあえず三〇〇〇人分（にんぶん）

行かれるおつもりでしょう？

地下世界へ

止めても無駄だとわかっていますからね

準備と後方支援の手配はおまかせを

…すまぬな

キタ！
お
駐在大使(ナニワザイタイシ)トシテ
コチラニ参(マイ)リマシタ
羽妖精侍女(ハネヨウセイジジョ)ト申(モウ)シマス
ヨロシク
オネガイシマス

オネーサン
ダヨ

は

次の書類がほしいでござる

みんな真面目に警備を続けているのでござるね

前回の戦いで国境警備の重要性もわかりましたし

連絡手段も重要です

通信塔の建築早くすむといいですね

あれはやはり来年まではかかるでござろう

旧白夜王国に
放った密偵からです

フム…

聖鍵遠征軍は
練兵を繰り返して
いるようでござるな

港には
大型の軍船が
集結…ですか

やはり
聖鍵遠征軍の
目標は…

うむ

まもなく出陣
といったところで
ござろう

これは
護岸船に

閲兵及び
行軍訓練の
指揮指導は

第一大隊長に
まかせるで
こざるよ

開拓村の収支の
報告書は…

それから
少尉には
近衛の訓練と

お断りします

へ？

そんなに 皆に
仕事を振りまくって
何を考えて
いるんですか？

あ
いや

そろそろ皆
自分の仕事を…

違いますよね

……

私は一緒に行きますからね

そこがどんな地の果てでも

…かたじけないでござる

いいえ

おじいちゃん今日の具合はいかが…

あら？

なに!?

鹵獲(ろかく)した
マスケットの数(かず)が
足(た)りない？

これを

誰(だれ)が…

将官殿(しょうかんどの)

マスケットの所に
こんな置(お)き手紙(てがみ)が…

ちょっと借りて
いきますぞ

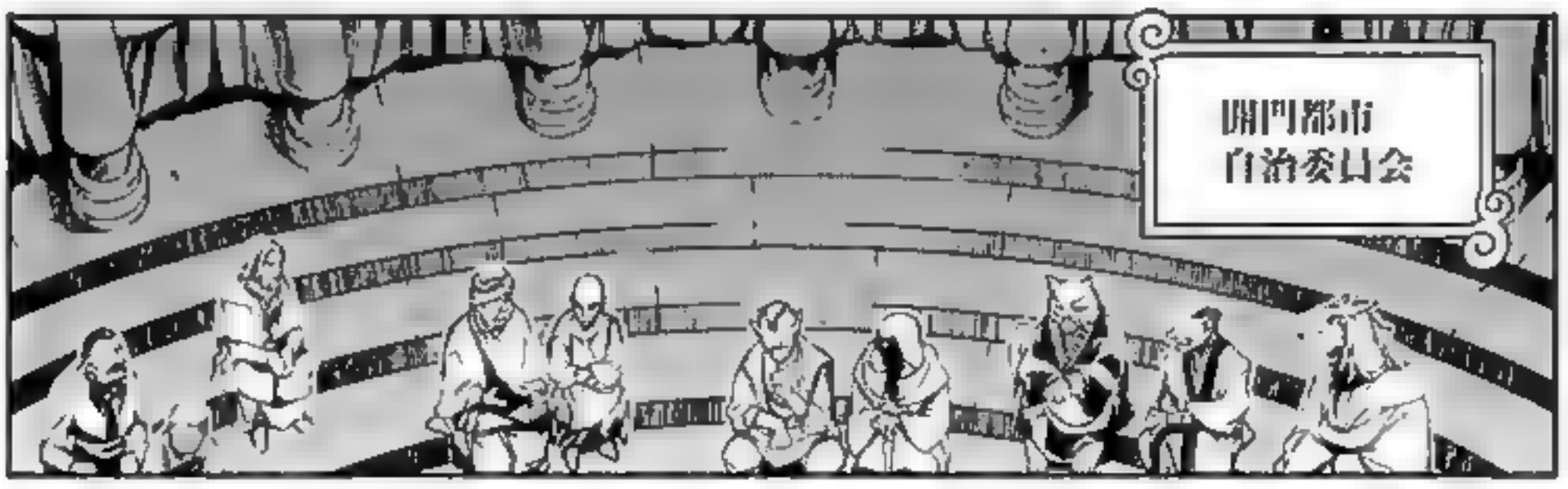
執事(しつじ)より

おお……
この敵の新兵器
性能と弱点を明らかにしなければなりませぬぞ
はっ

A"ガ
A"カ
A"ッ

早馬(はやうま)だ
A"カカッ
A"カA"ッ
カカッ

悪い知らせでなければいいんだが…



何の用件だ

急な招集じゃのう

火急の用件ゆえ

また城壁建設の話かの？

此度はそのことではありませぬ

以前話した聖鍵遠征軍の準備が整いつつあるようです

まもなく人間の軍がこの魔界に攻めてくることが予想されます

ゴゴゴ…

予想される人間の軍は総勢約三〇万

三〇万!?

彼らは
聖鍵遠征軍です

一回は
この街を征服した
あの人間の軍ですね

三〇万…

この都市の人口の
おおよそ六倍
ではないか

また人間か！

何回この街に
攻め込めば
気がすむ！

我らはここで
意見をひとつに
せねばならぬ
かと思う

この都市の兵力は少ない

同規模の都市に比べても少ないのだ

ましてや今は治安維持のための警備軍一五〇〇を残すのみ

…今主戦力は

うちの大将が連れていってしまってますしね

しかし聖鍵遠征軍の目標がこの都市とは限りません

人魔の狭間

人魔族

竜族

および旧蒼魔族領地の機怪族に警告を発するべきです

開門都市

竜の山脈

旧蒼魔族領地

ゲート

やはりもっとも
可能性の高いのは
この都市で
ありましょう

ええ
現実的に考えれば
それ以外には
ないでしょうね

この都市は
近郊最大の
物資集積所にして
交通の要にも
なっています

いまや
第二次聖鍵遠征の
ときよりも
さらに栄えている

たわわに
実った果実と
いうことか

……

まずは
人間の長老殿

市民の
気持ちの方を
聞かせていただきたく
思いまする

都市に住む
人間族の住民の声は
どうなのかや？

そうですな…

旅商人などを除き
我ら人間の多くは
もはや故郷に帰れる
などとは思っては
いませんでした

魔族になりきった
などというつもりは
ありませんが

少なくとも
この都市の
住民でいる自覚は
あったのです

正直に申せば
今さら…
という気持ちが
強いですな

聖鍵遠征軍が
「人間の捕虜を
救いにきた」
というのであれば

それはまさに
今さらでも
あるし

そもそものところ
そこまで非道な
扱いを受けている
わけでもない

救うくらいなら
捨てなければ
よいではないか
と

逆に一方
人間族の
裏切り者として
告発を受けるのであれば

それこそ
噴飯もの

この都市に
取り残された
人間の間では
あの司令官に
対する恨みが
ことのほか
強いのです

我ら街の住民には
ひと言も告げずに
出て行った
司令官にね

司令官の一存で
とり残され
この街で
暮らしていくしか
生きるすべとして
なくなった我らを

今さら
裏切り者として
告発するのであれば

もはや
人間界に対する
情も枯れ果てる

そう考える
人間が多数
でしょう

だが
その一方で
やっと
人間界との連絡が
取れ始めてもいた

通商といってはいいすぎですが
わずかな
やりとりが復活
しつつあったのも
事実です

それこそ
この都市を気に入り
これならばと
家族や子どもたちに
手紙を出そう

そして
もしよければ
招き寄せて
この都市に
骨を埋めようではないか

そう決意した
職人や商店主も
数多くいました
この私も
そうです

魔族と人間が
共同して暮らし
活気溢れる
この都市でならば

骨を埋めて
商売を行うのもよい

そう考える
市民も数多く
いたのです

我らの
本音をいえば

戦争なんて
まっぴらだ

そちらから
捨てたのだから

ほうっておいて
くれればいいと
いうものなのです

それは
こちらとしても
同じこと

かつて栄えた
神殿の都は

交易都市として
再生を遂げようと
している

ほうって
おいてくれれば
これに勝る
親切はない

しかし

「しかし」
なのでしょうね

そのようにして
興った貿易の富に
引きつけられて
くる者は多い

かつて魔族の間に
血で血を洗う戦乱が
あったように

今度は人間が
引き寄せられたので
ありましょう

あのぉ

なんじゃ？

ご

ごめんなさい

…やはり

負けて
しまいます

…よね？

常識的に
考えてみて

一五〇〇対
三〇万では
話にならない

そ

そうです
よね…

…おぬしは
抗戦を主張
したいのかの？

い

いえ

そんな

意見なんて
滅相もないです

…私
自分が何族だかも
わからない…
です

雑種って
いうんですか
いろんな血が
混じってるって
いうんでしょうか…

でも
だから
衛門の一族って
なんかすごく
うれしくて…
故郷というか
自分の家みたいに
思えてきて

この街が…
なんだか
すごく大切で

……

われら
衛門の一族は
自由を尊ぶ一族
…で
ありますか

そうですね
それはそれで
仕方ないでしょう

では
我々
自治委員会は
この事実を
つつみ隠さず
すべての市民に
公表したく思います

その上で
抗戦か 降伏か
交渉か
その意見を
募りたい

その議論の
なかで逃げ出す
ものも
人間の軍に
降るものも
いるかも
しれませんが
それはそれで
仕方がない

とうてい
賢いとは
いえませんが
仕方ない
でしょうね

魔族には
それぞれの氏族ごとに
流儀というものがある

流儀を失って
賢くあるよりは
衛門の流儀に従おう

異存は
ありません

各々がたも
近しい方と充分の
論議をしていただく
ことを望みます

どのような
結果になっても
それは自分たちが
選んだと思える
ように

捨てるにせよ
守るにせよ

それは我らが
決めること
なのだから

願わくば
我らが行く手に
碧の光の
あらんことを

湖の国 首都
「同盟」作戦本部

秘密工房の木炭は
ほぼ枯渇したようです

これで
聖鍵遠征軍に
対する補給物資は
大幅に少なく
なるでしょう

しかし
これでは やはり
足りませんね

「同盟」で
銀行が現在
設置されている
都市の数は？

えーと
六四です

南部連合を中心に
増やしたとして
一〇〇前後ですか

各支部に
「為替」を取り扱う
準備を通達してください

…為替を!?

それはリスクが
大きすぎるのでは…

承知の上です

為替というのは
遠隔地に
金を送るための
機構の一種です

現金を
直接送る場合
気候の変動や
盗賊 事故などの
リスクが存在します

そのリスクを
回避するための
仕組みが為替です

たとえば
ある都市で
金貨一〇〇枚を
証書に換えると
します

A国

別の街で
その証書を
金貨一〇〇枚に戻す
ことができます

これが
為替です

B国

両替には税が
引かれますが

これを実行する
ためには

別の都市の間に
同じ組織の
支部があり

それなりの
資金力を持っていて
信用がないと
成立しません

聖光教会は
この為替機構を用いて
莫大な利益を上げています

為替を
売買する場合
税として十分の一が
教会の懐に入る

今まで教会だけが
独占していた
その権益に
切り込みます

しかし
聖光教会の
支部の数は莫大で
これと正面から
ぶつかれば

今までさまざまな
商人や社会動静を
隠れ蓑に使ってきた
私たちの存在が
注目を
集めることにも
なりかねません

最大限
配慮しましょう

しかし
考えてもみて
ください

今この大陸は
政治的にも軍事的にも
文化的にも動乱の
まっただなかにあり

さまざまな勢力が
虎視眈々と
おのれの領域を
拡張するチャンスを
うかがっている

そのなかで
聖光教会は
指導者たる
大主教がゲーム盤を
離れているのですよ？

プレイヤーとして
そんな隙を
見逃すわけには
いかない

氷の国
王宮

勝機は？

もちろん
ありますよ

ガチャッ

女王様

新たな書状が届いております

女王様ー？

そー…

女王様!!

逃げないでください

放してー！

おいしい食事と優雅な音楽が私を待っているの！

天然痘の予防法の情報が流れただけで

これだけの書状とは…

湖の国や梢の国に送られたものも

すべて こちらに回してもらっているからですね

え？

こういった仕事は女王の得意とされることですので

ぜひ情報を一元化するように貴族子弟様が手配されまして

この仕事全部をあの旅行灯に押しつけてやりたいわ

ほとんど
ゴミね

「氷の国に
おかれましては
同じ人間としての
公徳心を持って
どうか我が領土に
薬を寄付して
いただけること
願います」

「我が国の勇猛なる兵の
餌食になりたくなくば
すべての医の秘密を
つまびらかに明かし
我が国に服従を誓え」

「天然痘の予防法は
広く人民に共有されるべきだ
研究目的で譲渡せよ」

ニヤ

「じょうおうさま
こんにちは
ぼくたちのむらは
おとなのひとが
てんねんとーで
みんなたおれて
くろくなって
たべるものも
ないです
たすけてください
おねがいします」

潮の王国の
辺境の村から…

すぐにでも
接種の薬と
修道士を
送らなければ

いや
少し待って
ください

これと同様の
手紙も数多く
来ております

同様の手紙
二四通はすべて
同じ書式で

おそらく
同じ紙とインクを
使っております

……

至急
人をやって
真偽を確かめ
させて！

まともな国の
支援要請については
私の一存では
決めがたいわね

これは
連合の会議で
はかることに
しましょう

天然痘の
対処方法の
情報は

ずいぶんな
衝撃を各国に
与えたようね…

とりあつかいに
注意しなくては

へやにもどって
処理を
続けて
ください

すげぇな

見渡す限り赤い土だぞ

ざわ

ざわ

お―…

あの碧の光が魔界の太陽なのか？

代行！

そろそろ
今後の行動指針を
話してくれ

そうだぞ
魔界に
着いたんだから
説明してくれ

先日
話したとおり
私のこの旅での
目的は

魔族軍側にも
遠征軍側にも
停戦のチャンスを
作ることです

…魔族軍側は
今のところ
放置するとして
人間の
遠征軍側ですね

勝算はあるのか？

ります
少なくともゼロではありません

どんな方法なんだ？

遠征軍が戦う理由をなくします
…その土台を

土台…？

そのために必要な物があって

遠征軍に会う前に
交渉を成立させなければなりません

それじゃ

はい

僕はここで
一旦離れさせて
もらうよ

なんだよ
あんちゃん

どこ
行くんだよ？

僕は
この付近最大の
交易都市である
開門都市へ向かう

情報が必要だし
補給物資も
必要だ

調べものも
あるしな

本音は？

お風呂に
入りたいですし

そろそろ女性と
お酒が恋しく
なってきました

まあ
任務はしっかり
こなしますよ

ご心配なく

彼女とは
打ち合わせて
ありますから

次の目的地で
合流の予定です

じゃあ俺たちは代行と？

どこへ向かうんだ？

竜の領域へ

竜の一族の本拠地のある火焔山脈です

火焔山脈…？

竜族だって!?

魔族の中でもっとも強いって噂の…!?

ええ

この魔界でもっとも古くから栄える大氏族です

竜一族
一万年の宝を
借り受けないと
いけません

出来たぞ

これが
マスケットの
改良版か…！

ゴッ

ドォ…

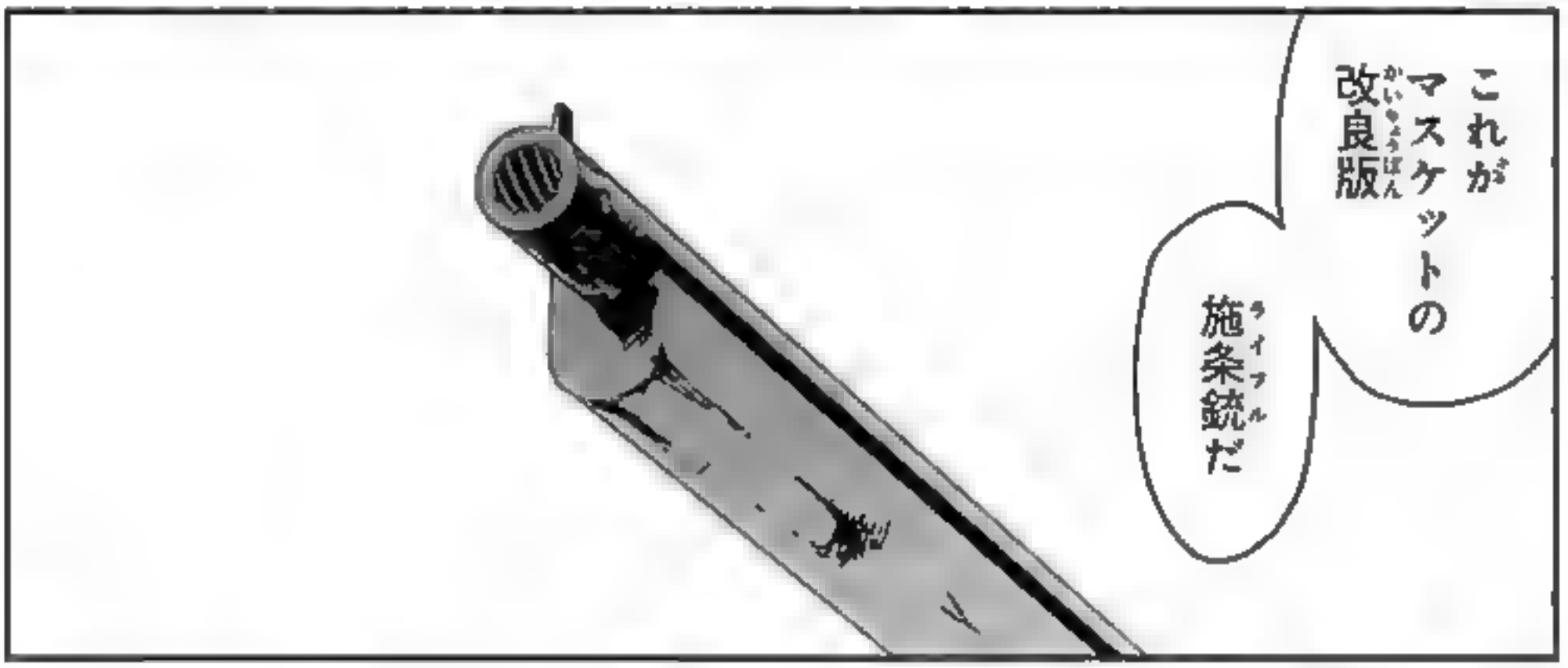
なんだ？

まるで
変わったように
見えないが…

外見はな
筒の中を
見てみろ

中…？

満？
中に向けて螺旋に…
そう


これがマスケットの改良版
施条銃だ

性能は？
おおむね要望を満たしているはずだ
だが…

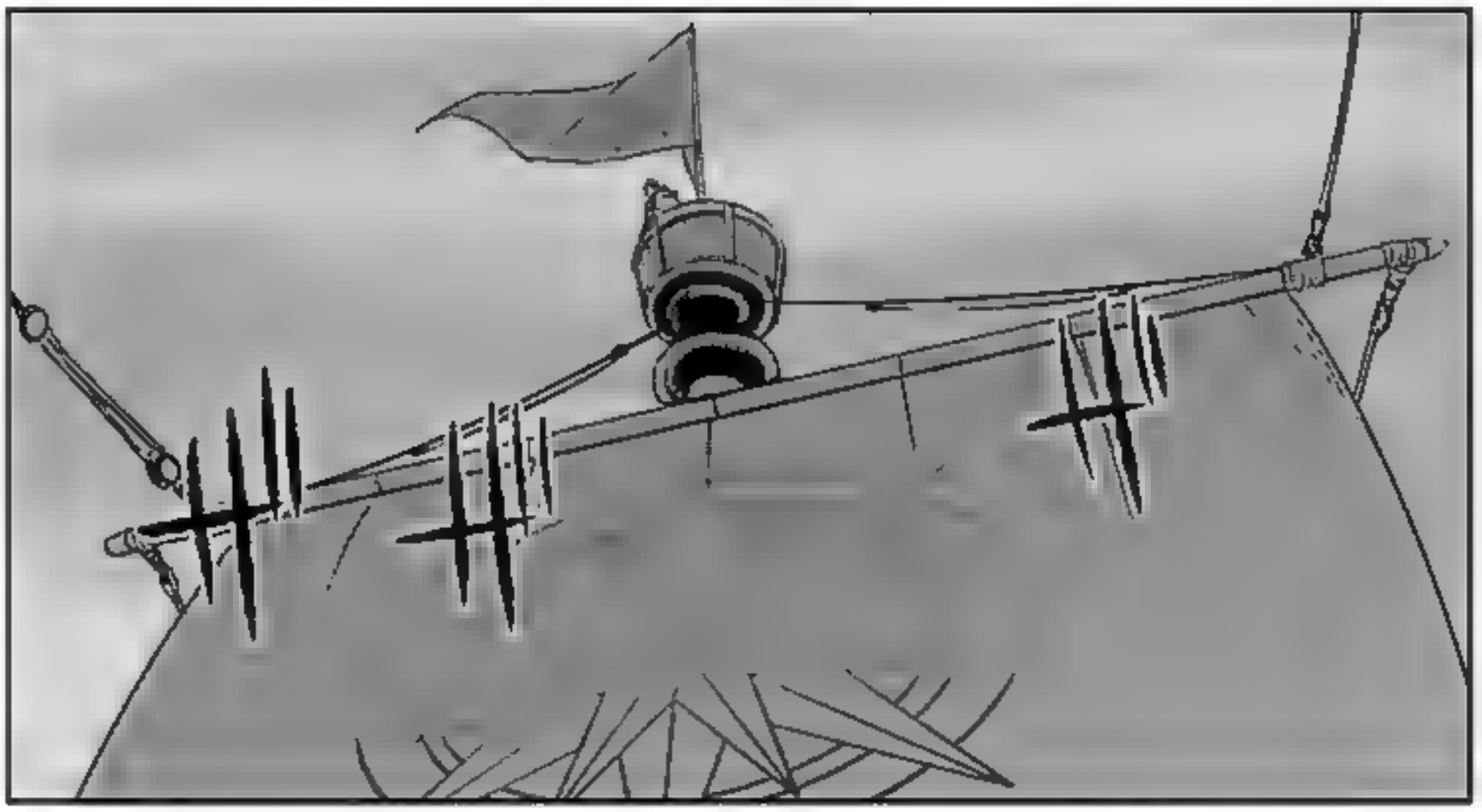
ああ
生産能力が聖王国と我々では比較にならない
少数のライフルであのマスケットの数に対向する策を考えなければならない

鉄の国の職人に
これと同様の物を
引き続き
製作するよう
依頼してある

悪いが
私に出来るのは
ここまでだ

私には
やらなければ
いけない
ことがある

魔王(まおう)として



総勢は
約二四万と三千

農奴による新規編制
歩兵部隊は二〇万強

うち
マスケット
部隊は一〇万

残りの
一〇万八千は槍兵
および大盾部隊

貴族軍
三万と五千

うち騎馬戦力
一万となって
います

また
これ以外にも
非軍事
参加者八万

非軍事参加者
というのが
気に食いませんな

そういうな

彼らは職人や
飯炊き女

それに
商人なのだ

彼らなしでは
いくら輜重隊を
整備しようが

軍そのものが
機能しなくなる

壮観ですな

かつて
この世界で
これほどの大軍を
率いたものは
おりますまい

ふ…

この大軍を
もってすれば
魔族はもちろん
南部連合とて
物の数では
ないでしょう

むしろ
気になるのは
聖光教会の
動きです

カッ
カッ
カッ

宗教的建前を
遠征に掲げた
とはいえ

大主教みずから
従軍するのは
たしかに妙だ

だが軍の
指揮権が我々に
あるかぎり

主導権は
こちらのものだ

それに…

得体は知れぬが
強力なカードも
手に入った

カッ
カッ
カッ

食事中であったか
これは申し訳ない
いやいや
勝手に食い
はじめちゃって
悪いね

ハグハグ

お味の方は
いかがか？
さすが
うまいなー
この肉とか
絶品！

あああ
魔界と魔族に
俺ほど詳しい
人間もいないぞ

魔界の道案内
貴公がついて
くださるなら
これほど頼もしい
ことはない

期待(たい)しているぞ
勇者(ゆうしゃ)よ

フフフ……

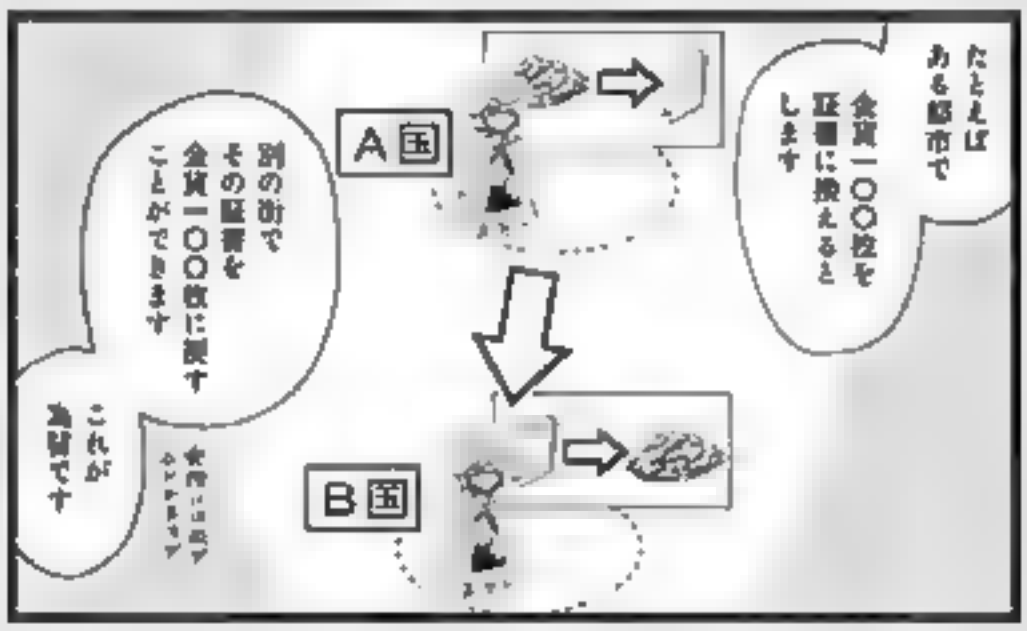
おお
まかせとけって

終 第四十三話
この山が…なんだかすごく大切で

第四十一回

為替の利点とその誕生

**現金を直接輸送することなく
取引を可能にした為替。
莫大な資金による裏付けが
システムの信用を保っている。**



為替は扱う機関の各支部に一定以上の資金を用意する必要があるが、手数料が収入となる

北イタリアで生まれた為替のシステム

為替とは、現金をやり取りする以外の手段で金銭の決済（借金の返済や支払いなどの精算）をする方法のこと、離れた場所にいる者同士が、貨幣を輸送することなく取引できるのが利点だ。

代表的なものとしては、銀行での振込やおもに企業間で使われる為替手形のやり取りなどが挙げられ、現代の社会で日常的に使われている。

現代の為替に通じるシステムが登場したのは、13世紀の北イタリアだった。

ヨーロッパでは、8世紀頃からイスラム勢力に圧迫されて商業が衰退していたが、封建制が安定したことや農法改革によって人口が増加。11～12世紀頃にイスラム勢力が後退したこともあり、ふたたび地中海での貿易が活発になった。

とくにヴェネツィアをはじめとする北イタリアの諸都市は、レヴァント地方（現在のシリアやレバノンが位置する地域）との貿易で繁栄。銀行や会社とともに、為替が誕生することになった。

当時、北イタリアのそれぞれの通貨を交換するを運搬するリスクを避けようと、公証人を立てて支払いの公正証書を作成するようになり、これが為替の原型になったという。

その後、イタリアの諸都市は独自の通貨を発行しており、それでなく教会の税の徴収や為替業務なども行い、やがて銀行へと発展していった。世界史に登場する有名なイタリアのメディチ家も、両替商から銀行家に転身した一族だ。

両替商が存在した。のちに、両替商は現金

さて、為替のシステムが成立するのは、確実に支払いがなされるという信用があってこそ。よって、為替業務を扱う機関は常にある程度の支払いに応じられるだけの、現金を確保しておく必要がある。

為替業務を独占していた教会は、取引の十分の一を税として徴収、資金源としていた

開中では、「回盟」が銀行を開いている。しかし、これまで為替は扱っていなかった。近年、同盟は青年商人の活躍で相当な利益を得たはずだが、それでもメンバーのなかには為替の扱いをためらう声がある。

為替業務を安定して継続するためには、それだけ巨額の資金が必要なのだ。

その眼に映る

ク…
ク…
ク…
ク…
ク…
ク…

巻末付録 Archenemy and Hero Special appendix

イラストギャラリー

角川コミックス・エース
まおゆう魔王勇者「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」(13)

漫画：石田あきら
原作：橙乃ままれ
キャラクター原案：水玉螢之丞・toi8

©Akira ISHIDA 2015
©2011 Touno Mamare

2015年1月26日 発行

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました
角川コミックス・エース『まおゆう魔王勇者「この我のものとなれ、勇者よ」「断る！」(13)』
2015年1月26日初版発行

発行者　堀内大示
発行所　株式会社KADOKAWA
http://www.kadokawa.co.jp/

〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
03-3238-8745(営業)
編集　角川書店
〒102-8078　東京都千代田区富士見1-8-19
03-3238-8719(編集部)

装幀・デザイン：沼利光（D式Graphics）

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。
本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず
本作品を第三者に譲渡することはできません。
本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に
予告なく変更される場合があります。
ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。
この物語はフィクションであり、実在の人物・団体とは関係がございません。